

島木赤彦における愛

——先妻うたと長子政彦——

宮川 康 雄

床記」に収められた「父の入婿」と題する一文がある。

父入婿の経緯を誌すと、久保田家の近隣に通称山久なる屋号で呼ばれてゐる家がある。当時の当主を久保田庄三郎氏と言ひ、現在の当主作治氏の二代前、即ち祖父に当る人である。その庄三郎氏が生糸製造業を営んでゐた。庄三郎氏の妻しう氏と、浅茅翁の後妻みとは姉妹関係で両家は、甚だ濃い縁戚であつた。さういふ間柄から父の実妹田鶴は、庄三郎氏の家の多忙の折は、時々手伝いに來て滞在してゐるといふ事が多かつた。丁度父が師範学校在学時代の頃のことである。

山久の家と私の家（久保田家）とは昔から極く親しい近隣同志であつた。私の家の北端には旧くから庭井戸があり、清冽で冷たい水が湧いた。当時の高木村の状態を言へば井戸のある家は僅々数へる程しかなく、私の家の井戸なども近隣十数軒の家々に朝夕ささやかながら其の恵沢を施してゐたのである。勿論山久の家もそのうちの一軒で、父の妹の田鶴も滞在中は屢々水汲みに來た。さういふことから丁度同じ齡頃であつたうたと懇意となり、娘同志の雑談から師範在学中の父のことが出て写真などを見せられた。当時私の家で養子を迎へねばならぬ事情にあつたから、当然父もその対象になつたものらしい。久保田家も塚原家も同じ諏訪高島藩士であり、それに庄三郎氏の妻しう氏の久保田家とうたに対する特別有力なる推薦もあつて、事は次第に具体的に進んで行つたものと思はれる。媒酌は高島藩の儒者土橋松軒であつた。

島木赤彦の妻として知られてゐるのは久保田不二子である。不二子の本名はふじの、赤彦と結婚後、赤彦に導かれて作歌を始め、はじめ節女、後には久保田不二子の筆名で歌誌『アララギ』に作品を発表、大正十五年に赤彦が病没した後も作歌を継続して生前に『菩提』（昭和七・六 岩波書店）『庭雀』（昭和二七・一 明日香社）『手織衣』（昭和三六・三 新星書房）の三冊歌集を上梓した。また、昭和四十年十二月十七日に数え年八十歳で没すると、翌四十一年十二月に遺歌集『松の家』（白玉書房）が刊行されたので、その歌集はあわせると四冊になる。歌人としてはまずは一応の仕事をしたといつてよいであろう。この不二子はしかし赤彦の後妻であり、最初の妻となつたのは、不二子の実姉のうたである。うたは、不二子と違つて世に知られていないけれども、赤彦の生涯を見る時、不二子以上に重い意味をもつ存在であることが知られる。しかしこのうたについて正面から取り上げた論稿は管見に入らない。そこで本稿では、赤彦と先妻うたと及び二人の間に生まれた長子政彦との関わりを中心として考察したい。

赤彦とうたとの縁談が纏まるまでの経緯については、昭和二十三年三月に沙羅書房から刊行された赤彦の四男久保田夏樹の『赤彦病

この記述によって縁談が成立するまでの事情がほぼ了解されるであろう。さらにいくらか説明を加えると、縁談が整ったのは明治二十九年、赤彦の師範学校三年在学の時である。同年十二月三十日、赤彦は実父の塚原浅茅に連れられて、初めて久保田家を訪れた。この訪問は赤彦の成育した諏訪地方の婚姻習俗で「出入初め」と呼ばれていたものである。縁談が進んでそれまでには成立というところまでできていたのであったろう。翌三十年の四月に今度はうたが塚原家に「出入初め」をした。兩人はこれ以後自由な交際が公認されるのである。『赤彦全集』の年譜に仮祝言の記載のあるのはこのうたの塚原家への「出入初め」の時点について記したものであり、必ずしも正確な記述とは言い難い。

赤彦とうたとは上述のように久保田家への入婿によって結ばれたのであるが、長女のうたに婿を迎えるに際して、久保田家が強く希望していた条件は、学校教員を迎えたいということであったろう。久保田家は、旧時代において諏訪高島藩に仕える傍ら自宅に寺子屋を開き、四代にわたって近隣の子弟に教えてきた寺子屋師匠の家筋である。当主政信の父政次の代に明治維新を迎えたことから、政信はその跡を継ぐことができなかつた。それで政次もまだ健在のことであつたし、ぜひ養子には教員をと望んだのは、十分に理由のあることであつた。塚原家は当主の浅茅が小学校教員であり、四男の赤彦はいずれ独立するか他家を継ぐかせねばならない状況下にあつたのであるから、双方の条件が一致したのである。

この縁組について疑問に思われるのは、新時代の教育界のエリートたるべき地位を約束されていた師範学校生の赤彦がなぜ二度目の養子として久保田家に入ったのかということである。すなわち久保田家では、赤彦が同家に入る前に近くの村の資産家から小学校の教

員をしていた青年を養子に迎えたのであるが、放蕩癖のあることから離縁になつた。その後赤彦が入つたのである。

このことについてまず考えられるのは、久保田家の方が旧時代において塚原家より身分が上であつたということである。久保田家が諏訪高島藩の御徒士であつたのに対して塚原家は、同じく長く高島藩に仕えてきたとはいへ、家職は桶職であつた。家格を比較すれば、久保田家の方が明らかに高い。維新後三十年を経たばかりの当時の地方において、家格の観念は、今日では想像し難いほど人々の心を強く支配していたのである。

次には両家の資産の相違であろう。久保田家は、高島の城下から隔たつた農村部の下諏訪高木に居住し、旧時代以来、多くの田畑を所有して裕福であつた。それに対して塚原家は旧時代にも家産と言ふべきものを殆ど持たなかつた上に浅茅の代に明治維新を迎えて家職を失つた。それで浅茅はこの地方で山浦と呼ばれている八ヶ岳の裾野地帯の寒村、諏訪郡豊平村に転居し、小学校の教員となつて、この時まで勤続してきたのである。小学校の教員の生活は収入が乏しく、しかもその間に家族から病人を出すなどしたのであるから、塚原家の家計は相当に厳しい状態にあつた。

むろん、赤彦数え年二十一歳、うた二十歳という年齢のバランスにも考慮が払われたであろうことは言うまでもない。

では赤彦はどのような考えをもってこの縁談に応じたのかというと、先きの「父の入婿」によると、「後年父に何故養子に行く気になつたかと訊く人のあつた時、父は皆が行けと言ふから行くものだと思つた」と答えたという。久保田家に養子に行くようにと望んだのは実は父の浅茅であり、赤彦はその意思に従つたのである。

赤彦の久保田家への婿入りは上述のようにして諏訪地方の旧習の

中で、旧習・旧道徳から一步も外に出ることなくして行われたのであった。仲人を旧高島藩の儒者であった土橋松軒が務めているのを見て、この縁組の性格がいかなるものであったかを推察することができるとであろう。

赤彦はしかし、さすがに何ら自分の考えも持つことなく他家の養子となつたのではない。このことについて、生涯の親友であった守屋喜七は、「君は塚原家から久保田政信家に養嗣子として入籍するや、人間としての「真の生き方」と「暮し方」とを区別され、真に生きる為には暮し方を第二に考えねばならぬとして、早く自分は養父在世の中は家政に関しない事と、家産は養父から自分の子供に引継いで自らは相続しない事の決心をしたとの事である。」（『教育者としての久保田俊彦』昭和一二・一〇）と久保田家に入った当時における赤彦の心事を伝えている。

明治三十一年の春に長野県尋常師範学校を卒業し、結婚披露の宴が済むと、長野県内の北安曇郡池田尋常小学校に赴任した。除籍謄本の記載によれば久保田家に正式に入籍したのは五月一日である。

池田小学校は、この年の六月一日から会染村との組合立の学校となり、池田会染尋常高等小学校と校名が変更されたが、この六月一日に赤彦は六週間現役のため高崎歩兵第十五連隊に入営した。それで池田町で新家庭を持ったのは、除隊となつて帰郷した七月中旬以後のことであるらしい。学校附近の民家に部屋を借りて新家庭を営んだ。

教師としての赤彦は青年らしい情熱をもって教育に力を注いだ。家庭においては、決してよい夫ではなかつたようである。池田町は、信州の松本から越後の糸魚川に抜ける道筋に当る旧宿場町であり、遊蕩の氣風が色濃く遺されていた。赤彦は忽ちにこの悪風に染まり、

梅香亭という小料理屋によく出入りするようになった。師範学校在学時に文学に熱中して学業成績が振わなかつた赤彦の月給は、師範の新卒者に与えられる三段階の俸給のうち、最低の十四円に過ぎなかつたのに、料理屋からの付けは二十何円も来るといふ有様で多額の借金を作ったという。その頃梅香亭に働いていた東京根岸生まれのおさわという小女を「コンガン」と呼んで可愛がり、友人から一人五円の金を集めて身請けをして逃がしてやったことが校長に知られて叱られたというのもこの池田に住んだ時のことである。

うたは、しかし、心根の優しい聡明な女性であつたらしく、このような赤彦と所帯をもつて悩むことがあつたとしても、それを表面にあらわにすることはなかつたという。今井邦子は、『アララギ』の「島木赤彦追悼号」（大正一五・一〇）に寄せた追悼文の中で、うたの人格について、「先生が御養子として久保田にお入りになつた最初の奥様はお歌様といふお姉様で、此の方は高木の村でも母親たちが娘を教へるのに、お歌様の真似をしると言つた位に出来た方であられたさうで」と記し、赤彦から直接に聞いた話を次のように書き残している。

奥様は生れて初めて郷里を離れて池田にお移りになつた。お金がなく先生が好きな煙草をあがられなくてつまらない顔をしておいでになると、／＼「お前様煙草をあがり度いづら」／＼さう言うて奥様は外にお出になつた。どこかの煙草店に行かれて、事情を正直にお話になつて煙草を一包借りて帰られた。それは奥様が池田へおいでになつて三日目位の事であつたさうで、全くなじみのない土地で夫に仕へられた真心であつた。（『恩師を偲びまつる』）

私生活の面において赤彦が放縱であつたり、うたが夫に尽くしたについては、あるいは、赤彦が初婚で久保田家の二度目の養子とな

ったことが翳をおとしているのかも知れない。そうしたことは当然あり得ることである。しかしうたの人柄については金原省吾も「この方は私が先生にお近づき願へた頃にはもう故人であって、私は直接にはお知りできなかつたが、実によい方で、内面から人格的に輝き出すといふ風に感じられたさうです。」(「島木赤彦の生涯」)と記している。うたは確かに貞淑聡明で、この時代における女性の美德をそなえた人であつたのであろう。

赤彦はうたと共に生活し、日を経るに従つて、うたに対して心底から深い愛情を感じるようになっていった。それはやがて「おれは全くしまひにはまゐつてしまつた、真から惚れてしまつた」(同上)と今井邦子に語つたような心情を赤彦にいだかせることになつたのである。赤彦は後に金原省吾に対して、池田時代の放蕩を振り返つて「すまないことをした」と、時々心の底から慨きをもつて、感謝と謝罪とをこめて」(同上)、語つたという。

「追懐の歌」は赤彦がうたと共に池田に住んだ頃のことを回想して詠んだ歌で、明治三十七年二月発行の「比牟呂」に掲載されている。多分、うたの三回忌に詠んだものであろう。

背戸畑にえぞ菊苗を植うゑし時笑みて見たちしはしき吾妹子
五月雨るる野川の岸に我好む覆盆子手折るとぬれて立ちし妹
煙草買う錢乏しくわびし朝隣に行きて煙草借りし妹

明治三十二年度に入るとうたに妊娠の兆候が見えたので、赤彦は大事をとつて実家に帰し、自分は池田の北に隣接する社村の遠縁の家に間借りをして中等教員の國語漢文科の検定試験を受験するため勉強に打ち込んだ。久保田家の婿となつた自分の立場と将来について強く自覚するところがあつたのであろう。受験の結果は失敗に

おわたたけれども、この勉強によつて得た日本古典についての知識は、後年赤彦のために大いに役立つことになつたのであつた。

うたは翌年の二月十一日に、無事男子を生んだ。夫婦はもとより家の後嗣となるべき長子の誕生は久保田家としては数十年ぶりのことで、一家の喜びは大きかつた。赤彦の実父浅茅は他家に養子となつたわが子に男子が出生し、しかも誕生日がめでたい紀元節の日であつたというので、慶祝の和歌を詠み、久保田家に贈つた。

出生した男子は、久保田家の当主が代々受け継いできた「政」の文字と父赤彦の本名俊彦から「彦」の一字をとつて政彦と命名された。

赤彦は同年五月の新学期が始まつたばかりの時に郷里の諏訪郡玉川小学校に転任したが、これは台湾から病氣を得て帰つた次兄の秀彦が前年の暮に病没し、実父の浅茅が寂しい思いをしているのに長兄泰蔵は郵便局勤めで長野にあり、身辺の世話もままならないので、比較的自由のきく赤彦が転任を希望し、無理を叶えてもらつたのであつた。玉川小学校は師範入学以前に授業生として務めたところで、実家のある下古田の集落とも近いので、しばらくの間は生家から通勤したが、七月になると、玉川村の菊沢部落に間借りをして高木からうたを呼び寄せて同居した。

赤彦はこの玉川小学校で、「諏訪文学」を主催していた岩本木外と同僚になつた。木外は正岡子規を訪問したこともある日本派の俳人で、子規の唱える俳句——いわゆる根岸趣味の俳句——を広めるべく「諏訪文学」を刊行していた。赤彦はこの木外と親しむようになったことから、新たに写生派歌人としての道を歩み出すことになつた。すでにこの明治三十三年の十二月に発行された「諏訪文学」に「和歌漫語」と題する評論を発表しており、翌年の一月からは短歌

欄の選者となった。傍らにその樹が植えられていたことから「柵牟庵」と呼んだ学校の宿直室が寄合所となり、ときに来訪する近隣の村の青年たちも交えて、盛んに文学を論じ、句作や歌作に熱中する日々が以後数年の間続くことになるのである。

二

明治三十四年の四月九日に長女が生まれ、たけと名付けた。命名は竹のように健やかに成長してほしいとの願いを籠めたものであったであろう。しかしたけは、同月の二十五日、生後十七日めにして短い命を閉じた。赤彦はその夭折を嘆いて「哀傷」三首を詠み、また追悼の句を作っている。

たけの死は、しかしこれ以後赤彦の上に相次いで襲ってくる不幸の前兆であった。

たけを生んだあとうたは産後の肥立ちがはかばかしくなく、健康の回復が遅れたらしい。たけを失って心に痛手を負ったことも回復を遅らせる原因となったであろう。うたは実家で療養し、回復に向かつてから玉川村に戻って来た。

生来虚弱であった政彦は、この年になると、眼病を患った。症状については詳しく知ることができないけれども、相当重症であったようである。夫婦は政彦の看病で心身を消耗し尽くした。

赤彦はこの間にも校務で多忙の日が続いており、十一月七日には諏訪教育会の事業として取り組むことになった「言文一致 小学手紙文例」の選述の仕事に着手した。

うたが発病したのは、この仕事がようやく完成した十二月三日から二日後の十二月五日のことである。うたの病状の推移を赤彦の日記によって少し詳しく追ってみる。

うたの発病については、十二月五日の日記に、「うた病氣 長野の兄と面会」との記録があることから、その事実を認めることができる。「長野の兄」とは長兄の泰蔵である。うたの病氣は、その後、回復に向かうことなく、赤彦が病状を気にしていたらしいことは、十二月十日の記録に、「うたやゝ悪し」とあることから推測される。しかし、十一日の記録に、「うたよし」とあって、その後記載がなくなることからみると、病状は平衡状態に入ったのではなからうか。仕事で忙しかったことや、うたがこのころ病氣がちであったことなども、赤彦に深くは氣に留めさせなかった理由であったかも知れない。

年が明けて明治三十五年に入ると、赤彦は元旦の日記に、「何かアラン、今年モズン／＼ヤルペンダ。」と新年を迎えての意欲の程を見せている。ところがこの日、うたの病氣が再発したらしく、赤彦は右の記述のあとに「うた病氣、岩波医師来ル、古田母上来ラル。」と記している。もっとも一時はともかくとして、病状はさほど心配するほどのこともなかったらしく、赤彦もこれがやがて大事に至るとは思わなかったであろう。

翌二日の記録をみると、「高木母上、ふじさ来ル。神宮寺ノ会ニ行ク能ハズ」とあり、外出できなかったことが知られるが、この日養母と義妹の二人が来訪したのは、年始のためであったか、病氣見舞いを兼ねてのことであったか、必ずしも判然としない。この記述に続いて日記には、「うた病氣ヨロシ」とあるから、病状は回復に向かうものと考えていたらしい。四日には年頭の挨拶のため村長その他の家を廻り、六日にも外出して友人と飲酒をしている。

うたの病氣は、しかし期待に反して回復することなく、翌七日になると急変した。同日の日記に赤彦は、「うた病氣再発、岩波医師

来り去ル 延川及ビ穴山、岩波三医来ル病状悪シ、」と書きのこし
ている。病状が急速に悪化し、うたが憂慮すべき状態に陥ったこと
が推測されるのである。急便をもって下古田の生家、四賀村の養父
の妹の嫁家の小松家、高木の養家に知らせ、また他に一人の医師を
呼ぼうとしたことは、「古田、桑原、高木ニ飛便」「神宮寺医師ニ飛
脚」という記述があることからも知られる。これらの医師は、いず
れも旧藩出身の人々で、古くからの関係があったとはいへ、四人も
の医師を呼ぼうとしたことをみても、周囲の人々の狼狽ぶりが窺わ
れる。「村長、五味、全家大尽力」とあり、また「村ノ衆来リ経オ
ヨム、」とある。病氣平癒の祈願が慌しい中で行われたのである。
「小沢来ラズ。」とあるから、神宮寺の医師は何らかの事情で来診
できなかったであろう。急を聞いて養父の政信とその妹小松くん
も駆けつけて来た。

このような必死の看病と人々の病氣平癒の祈願もしかし空しく、
うたは、同日午後十時四十分、遂に死亡した。

赤彦の日記は次のように続いている。「大驚、大悲、已ニシテ大
茫然ノ 終夜遺骸ノ傍ニ侍ル。ノ古田父上夜雪オ犯シテ来ラル。ノ
父上夜十一時高木ニ帰ラル。ノア、只茫然、涙モ出ヌ、ア、何モ云
イマイゾ。大ニ雪フル。風吹ク、政彦ヲ母上抱テ寝給一。ふじさ泣
クコト甚劇、桑原叔母上、落胆終夜涕泣、衆皆然リ、何ダカムチャ
クチャ」。

うたの死後食事も喉を通らぬ日々を赤彦が夢中のうちに過ごして
いるうちに、十一日には葬儀がおわり、初七日も過ぎた。

赤彦は以後の日記に、次のごときうたを追悼する俳句を書き連ね
ている。

桐壺の昔語りも寒さかな

残る子に寒き思やおき布団

(十三日)

天来の楽も聞えよ冬の月

冬籠悲しき歌に親まん

寒き児をゆすぶる歌や男泣

(十五日)

亡き人の布団とくなり冬日和

亡き人となりてつめたき小袖かな

(十六日)

月が変わって二月一日になると、「ア、一月モ終レリ。彼逝テ
コ、ニ二十五日、思出ノ涙オ胸中ニ収メテ塵世ノ事ニ奔走スル寧ロ
愚ナルオ感ズル也」と記しているが、下旬になって、四十九日がく
ると、赤彦は改めてうたを思う気持ちを新たに示した。二月二十五日の
日記に、「明白うた五十日忌ニ付帰宅ノうた去て已に四十九日ソノ
間ノ我感想ヲ如何バカリゾノ追懐ノ情交々起ル」と記しているが、
ここに四十九日忌ではなく、「五十日忌」としているのは、生家の
塚原家では神葬祭が行われていたためであろう。
翌二十六日になると、次の歌を日記に書き付けている。

風交りあられ降る夜の寒けくにひとりか寝ねん孤子なれわ

幼くて親に別るる悲しみお悲しとだにも知らぬ吾子かな

明日よりわ誰か添乳の夜の床にいましが好む歌お聞かせん

この宿によき名おふせて妹とわれと千代（生かむかお思へばかなむ）もすまむと思いたりける

わが為に夜すがらぬいし綿入お汝のかたみに見んと思えや

くやしかも斯くと知らねば妹も我も千とせの如く頼みたりける

うたが死去した後の赤彦のこのような悲嘆の有様を目のあたりに
して、周囲の人々は慰める言葉もなかったらしい。今井邦子は、

「先生はどうしてもあきらめられなかつたとお話になつた。毎日茫然と気抜けがしたやうに成つて居られるので、生家の御父様がそんなにしてゐては人が笑ふと意見をなされた程であつたといふ。」
 (「恩師を偲びまつる」と赤彦の直話を伝えている。)

さにあらじ

さにあらじ彼の下駄音は

わぎもこのかへりにあらじ

春の宵下駄のひゞきの

耳につく道のをちかた

山幾重 遠くさかりて

空いく重 海をわたりて

世の旅にさすらふ人も

年ふれば家路をおもふ

わぎもこはこの世をはなれ

静かなる心となりて

かの山の石にあなれば

何時の日か帰りをまたむ

(下略)

これらの新体詩もうたとの永別を悲しんで作られたものである。しみじみとした追慕の情のよく現れたこの詩は、詩歌は真情の表現をこそ尊ぶべきものとする子規の教えに学んだ成果であるといふこともできよう。この作品の発表されたのが、同年九月発行の「文庫」(第二十一卷第二号)であり、赤彦の三月二十七日の日記に「醉

おもほへば

おもほへば

君が如くに

何ものか

静かなるべき

北の海

氷の山も

めぐる日の

光に流る

熊こもり

ねむれる森も

大そらの

風にさやなる

(下略)

茗より来信」の記載のあることからすると、あるいは「文庫」の編輯者であつた河井醉茗の勧めによつて作詩されたものであるかも知れない。醉茗は赤彦が新体詩の創作に熱中した師範生の頃から交流のあつた詩友であつたからである。

うたの五十日忌が過ぎる頃になると、赤彦の今後の身の処し方のことが現実の問題として表面に現れてきた。養父の政信がうたの実妹のふじのを妻として久保田家を継いでくれるやうにと希望したのは、長子も生まれていゝま、当時としては十分道理のあることであつたと言へる。これは、「直す」という言葉で呼ばれていた、このやうなときにはよく行われていた旧習であつたからである。

ある伝えによると、赤彦はこの話に気が進まなかつたという。ふじのは下諏訪小学校の高等科を卒業した後に長野師範学校の第三種講習会を修了し、准教員の資格を取得して、前年の九月からは玉川小学校に臨時の裁縫教師として勤務していたけれども、十歳の年下で、まだ数え年の十七歳であつた。

赤彦は結局、養父の希望を受け容れふじのと再婚したが、このとき赤彦に最後に決心させたのは、うたとその遺児政彦に対する愛情であつたと見て誤りはないであろう。赤彦が自分と政彦の行く末を思つて深刻に悩んでいたことは、二月二十六日の日記に、

いと子わいかにかならん我わいかにならんと思わぬ日ぞなき
 汝と我と膝の上さらずおほしけんわ子のおもわお見ればかなしも
 などの歌の記されていることから推測できる。それが、三月二日の日記を見ると、

その母わこのよおさりぬその父わ残れる稚子お永く守らん

という歌があつて、この間に赤彦がうたと政彦とに対する愛情から、政信の希望を容れて久保田家を嗣ぐ覚悟を決めたことが知られるのである。そのことは三月二十四日の日記の記述を見ると、いっそう明白である。

一ヶ年ノ事業全ク終リ一日中小泉園ニふじのさと語ル。ア、一ヶ年、然リイカニ想同多キ一ヶ年ナリシゾ／ア、我が一生中、カカル複雑悲劇ノ歴史ワアルマジ彼ノ去リシワ一月七日ノ夜、雪大ニ降り風劇シク吹キシ夜ナリキ／今夜天曇リ折々雪フリ、精神界ユツクリスレバ忽チ復現シ来ルオ如何／ナツカシカリシうた子、満腹の愛オ注ゲリシうた子、ア、願ワクワ安眠セヨ、我汝ニ代リ政彦ノ一生オ見ン、久保田家ノ行末オ見ン／ア、慈悲深カリシ彼、思慮アリシ彼、涙多カリシ彼、情温カク意濃カナリシ彼、／我遂ニ汝オ見ルコト能ワザルカ、嗚呼嗚呼、コレガ人生、コレガ一生、ア、ア、

ふじのと再婚したのは、戸籍の上では七月二十八日であるが、次女のはつせが生まれたのは翌明治三十六年の一月十二日であるから、事実上の結婚はこれより早い。

この結婚はしかし、その後赤彦の長年に亘る苦悩の原因となつた。夫婦間の調和を欠いたからである。理由の一つは年齢差のあり過ぎたことであるが、より大きい理由としては、ふじのが気性の強い女性であつたことを挙げなければならないであろう。うたが母親のぬゑに似ていたのに対してふじのは無骨一遍の父親の政信に似ていた。赤彦はうたのように心の優しく情の濃やかな女性が好みであつたのである。しかも、うたの死後もなお赤彦がその面影を追い続けていたことがふじへの不満を増幅させることになつていたのである。

夫婦の仲が結婚後そう年月も経たないうちに調和を欠くようになつたことを示すのは、赤彦が明治三十六年四月八日に守屋喜七に送

つた書簡である。この中で赤彦は、昨日学校の宿直室で島崎藤村の「旧主人」を読んで泣き出したと書いてある。「旧主人」は同年一月発行の「新小説」に発表された短篇小説であり、同誌はこの作品を掲載したことによつて発禁の災厄に遭つたのであるが、この小説の中には、若く美しい女性と再婚した夫が一年もしないうちに飽きてしまい、先妻の時のように気持が互に通ずることもなく、万事につけてうまくいかないのに苦しみ、二度目の結婚はもう結婚とはいわれない、と云つて嘆く言葉も記されている。赤彦は多分、作中のこの夫の嘆きを身に引き付けて読んで思わず泣き出したのである。

赤彦はうたの亡くなった明治三十五年の九月には、実家の祖母塚原さよの死にも遭つている。さよは上諏訪岡村の金井家の出で、赤彦の祖父塚原七郎右衛門に嫁し、一男二女を生んだが、夫が早く世を去つたため、浅茅とその二人の姉を女手一つで育て、長年家を支えてきた塚原家の大刀自である。享年八十八歳であつた。

正岡子規が数え年三十六歳の壮年で、和歌革新の業半ばにして結核に斃れたのも同月の十九日である。赤彦は子規の死を悼んで、

呉竹の根岸のさとに鶯の来鳴きはすとも君歌はめや
いませりし病の床に一度もはべり見ずして今ぞくやしき

など、「悼子規居士追善」の歌を詠み、子規の唱道した写生主義の道歩むべく決意を新たにした。

こうしてうたとの死別とふじのとの再婚、子規の死に遭つたことなどは、赤彦がやがて文学を生涯の業とすることを真剣に考え始める契機をなしたものと見て重視されなければならない。

これより数年の後の明治四十年四月三十日、赤彦は三沢精英に宛

てて、「扱小生は数年來色々考へてゐるが全然文学を以て身を立てる(?)が行く／＼の方針として適当かと愚案いたし候教育者も面白いがそれ以上に文学と小生は縁の深い様考へられ候」と記し、「人間は一生なり」といふ事が真面目に熱心に今小生の心頭に念ぜられてゐる」と、その心情を表白しているが、これは上述のような身辺の変化によつて自分の将来について深く慮るところがあつたからであると考えられる。これより先き、すでに明治三十三年の二月には、松本平においては、太田水穂・窪田空穂・矢ヶ崎奇峰らの青年によつて新派和歌の会「この花会」が結成されてゐた。赤彦たち諏訪の青年も明治三十五年の末につばな会(津波奈会)を組織し、太田水穂・矢ヶ崎奇峰ら「この花会」のメンバーも加えて、翌年の一月には『比牟呂』(創刊号の表紙の文字は「氷むろ」)創刊している。こうした状況の推移ももちろん赤彦を文学の道へと促す力となつたのである。

赤彦は、文学で身を立てる決意を固めたことから、明治四十一年三月、高島小学校を退職し、養鶏の仕事に従事した。しかしこの目論見はもろくも失敗に帰して、翌明治四十二年春に東筑摩郡広丘小学校に校長兼訓導として赴任、在任中に第一歌集『馬鈴薯の花』に見られるごとく新しい抒情の芽生えを示し、また、部下の教員中原静子(筆名、閑古)と恋愛関係をもつことになるのである。そのようにして広丘村での二年間の生活の後、明治四十四年四月に玉川小学校に転任したが、この直後の四月十八日の夜に藤森六七に宛てて数え年十歳の幼時に生母を失つて以来相次いで自分の身の上に起こつた不幸の歴史を振り返り、「コンナ生活ヲ続ケテ来テモ自分ハ世ノ中ニ猶幸福ガ私ノタメニ充満シテキルコトヲ感ズル」と書き、「私ハ境遇ト生命トヲ区別シテ行キタイ暮シ方ト生キ方トヲ区別シテ行

キタイ境遇ハスベテ私ノ生キ方ノ修養デアツテ實ヒタイ」と記したのである。ここに「境遇」を「生キ方」の修養の機会とするというような考えに赤彦が到達したについては中原静子との別離が関わっているであろうが、同時にこのときの赤彦の脳裏には、かつてこの地において生活を共にしたうたの面影が浮かんでいたに相違ないのである。

三

遡つて政彦の眼病は、ふじのによつて育てられるようになってからもはかばかしい改善の様子が見られなかつた。数え年五歳の明治三十七年になると、政彦の症状はまた悪化したらしく、赤彦は心痛して次の歌を詠んでいる。

児の病三月に亘りて未だ癒えず。悲しみて詠める

まさ布をとれば喜び笑みれども天地のもの吾子は見ずかも

めぐし子は物をし見ねば真悲しみ花も手折らずそのかの親も

真悲しき吾子が手引かへさき庭の梅の木かけに我は立ち泣く

まさやかに眼しあらば吾子のため夜照る玉も吾はすつべし

政彦の眼病はその後も回復に向かわず、明治三十九年の二月にはさらに悪化した。当時赤彦が書き続けていた「歌日記」を見ると、二月十八日。終日湖水踏査にて風引き学校を休む。廿一日。出校せるも心地よからず宿屋に泊る。翌日帰宅すれば、長男政彦(七歳)眼病又悪しといふ。充血甚しく痛出でて開く能はず。彼が眼病は已に二年なり。やゝよろしと思ひ喜びしに又斯の如し。我終夜眠る能はず」という記述のあとに左記の歌が記されている。

荒玉の年の二とせ一日だに汝れが眼を忘れて過ぐせや

親心すべなき時は眠りたる汝が見つつ夜を寝ねず泣く

眠りたるまなこ開かし薬注すくすりのいたみ夜毎泣かしむ

己が子ろの病めらく知らに奥津岐にねむれるははを我はうらやむ
生ける時しが子たむだき悲しびし黄泉の我妹子今も守らせ
なが病おこたる時は天津風千雪鬨きて日を見る如し

我が事のうれしき時も下ごころ直ちに汝れをおもひ悲しむ

二十四日。政彦眼病よろしからざるに、又々実扶的利亞病を得。我仲々措く能はず

すやすやに眠れる寝顔世の中の罪なき汝し病みてこやすも

父われの言聞き分きてにがき薬たへ忍びのむころかなしも

三四四日も弟妹の顔見ねばその名よびつつ顔もたぐるも

医師がいふよしとふ事を悉になしつくしつ時待ち難し

この二月は養父の父政次が八十二歳の高齢で亡くなった月であるが、赤彦はその挽歌をのこしていない。政彦の眼病の症状を憂慮するあまり他に心を向ける余裕を失ってしまったためである。六月になると政彦は他の兄弟と同様にジフテリアにも罹患した。

この明治三十九年の春に政彦は小学校に入学したのである。尋常科を卒業すると高等科に進学したが、高等科在学中に一年間休学、その後復学して卒業後すると、以後は進学することなく郷里の家にあって農事の手伝いをして過ごした。

政彦は上述のように教育こそ十分に受けることができなかったものの、生来資質に恵まれた聡明な少年であつたらしく、生前の政彦をよく知っていた金原省吾は「赤彦の生涯」の中で、「政彦君は性質に厚みのある、そしてふくむ処の豊かなよい子供でした。先生の

少年時の乱暴なところを取り去れば、かふいふ素直の子供になるのではないかと思ひました。自分の運命に甘んじて、黙然として、しかも心傷けられず、そこなはれずおひたつてきたといふ感のする少年でした。養ひ育てた人達の心づかひも見え、自ら享けた素性も見え、すぐれた少年でした。」と回想している。

その後大正二年六月に政彦の眼疾がまた悪化し、翌七月には失明が心配されるまでになった。赤彦は七月二十三日の夜行で政彦を伴って上京した。「子の眼病に重大なる疑問を宣せられて直に東京に向ひぬ。夜一夜汽車に揺られて七月二十四日晩飯田町に著けば直に車並べて病院に伴ふ。疲れを休むるひまもなし。親心只恐れ急ぐに」という詞書をもつ「病院」はこの時の作である。入院させたのは、神田区和泉町の小川眼科病院で斎藤茂吉から紹介を受けていたのである。

静もれる車上の姿、みづからの病を知れる吾子が静もり

あが人力車動きてあるを覚ゆれど眼の前の子をこそ守れ

ふと我にかへるわが身は暑ければ流るる汗を拭かんとすなり

薬さす眼をおさへつつ眼るまでに疲れて遠く来らしめしか

親心おろおろするも坐りゐて額の汗を拭きてやれども

空瓶に煙草のはくみ払ひたる心のあやしく笑へざりけり

政彦の入院した二十四日の午後には伊藤左千夫が病院を訪ねて来て歌論をしてしきりに気炎をあげて夕方に帰ったが、この時が赤彦が生前の左千夫に会った最後となった。政彦を病院に預けて、赤彦が三十日に帰郷すると、その深夜に、左千夫が脳溢血で急逝したとの報知に接したのである。

政彦はそのまま長い入院生活を送り、年を越した。半年余の入院

生活中には短歌も作ったらしい。その歌がどのようなものであったか知るべき資料はないが、斎藤茂吉がその歌を見て感心し、赤彦よりうまいと言つて褒めたということを金原省吾が記している。「その時政彦君のかきとめて置いた父を想ふ歌などを、斎藤茂吉氏は見て感心し、これは父親よりうまい、そして素性がひどくよいといつて、我がことのやうに喜びました。政彦君はお父さんには見せず、そつと茂吉氏に見せたのです。先生は政彦君が歌を作つてゐることを知らなかつたやうでした。(中略)茂吉氏は「アララギ」に載せようといふのを、先生は「まだいけない。少なくとも一年はいけない」といつて承知せず、歌稿を自分の方へとり上げてしまひました。さういふことで子供を甘やかしたくはなかつたのです。」

治療の効果があつて政彦は、幸い失明に至らずに済んだ。赤彦は大正三年二月に政彦を郷里に連れて帰つた。

赤彦が出京するのは、この時から二か月後の同年四月のことである。赤彦の出京は欧州への留学が予定されていた斎藤茂吉のあとを受けて、「アララギ」の編輯発行の任に当たるためといふことであつたが、その裏面に中原静子との恋愛の行き詰まりがあつたことはずでに広く知られている事実である。同時にその脳裏には、常に気にかけていた政彦の眼病の治療にも都合がよいというような考えも浮かんでいたのであろう。

赤彦は果して出京以来住居としてきた小石川区上富坂町のいろは館から十二月下旬に同区白山御殿町に転居、中風の症状の出で来た養母を見舞うために帰郷、越年して、翌年一月七日に上京する際には政彦を伴い、再び小川眼科医院に入院させて、一月の末まで治療を受けさせている。

古井戸に覆ひかぶさる桑のかけに顔を洗ひぬ我が子とふたり
父と子と顔あらひ立つ桑のかけ別れることは思ふに耐へず
子をつれて来り拌めりわが家に猫をまつりし屋敷の小祠

政彦に注ぐ深い愛情のあらわれたこれらの作は、「アララギ」の大正四年十月号に掲載されたものであるが、この歌の動機は右の帰郷の際に生まれたものであつたらう。

四

政彦が急逝するのは大正六年の暮である。赤彦はこの年の五月に東京市外(北豊島郡高田村)の雑司ヶ谷亀原に一戸建の二階家を借りて郷里から家族を呼び寄せている。家を構えたのは、前年に大病に罹患し、東京で独居生活をしながら仕事を続けることの困難さを強く認識したためであつたらう。五人の子供のうち、次男健次、次女はつせ、三女みをの三人を上京させたが、このとき政彦は三男の周介と共に郷里に残された。政彦を残したのは、養父の政信が希望したからであるといふ。

家族を上京させるとほぼ同時に「信濃教育」の編輯主任を引き受け、以後毎月、この仕事のために東京・長野間を往復し、その間に下諏訪の養家にも立ち寄るといふ多忙な日々を過ごすことになつた。八月、北海道に旅し、異母弟瑞穂の身辺の世話をし、また、伯母(実父の姉)三溝たかの展墓を済ませて帰郷した。九月の末に暴風雨の襲来に遇い、一夜嵐と戦つて、家屋を暴風による倒壊から守り抜いた体験によつて赤彦が自分の写生歌についての信念をより強固にしたことは知られているとおりである。

その後も眼疾が悪化すると上諏訪の病院に入院して治療を受けて

いた政彦が上京してきたのは、このあとである。政彦の上京の時期については多少疑問の余地がないでもないが、歌集「氷魚」の「わが子」の詞書に「十月長男政彦信濃より来る。」とあり、またふじの歌集「苔桃」の「巻末記」にも十月のことと記されているから、一応十月のことと見ておいてよいであろう。

赤彦が亀原の家に留っていた政彦を耳鼻科の専門病院神田区の神尾病院に伴い受診させたのは、十一月十日である。岩波茂雄と共に十一月一日に榛名湖に遊んだ後長野に行き、九日に東京に戻った翌日であった。

受診の結果は蓄膿症との診断であった。政彦は十二日入院、十三日に手術を受けた。出血が相当にひどかったらしく、甚だしく体力を消耗して、退院するとそのまま両親の許で療養に努めていた。

十二月七日になって、政彦が腹痛を訴えるので、二階から階下の座敷に移して医者呼んだ。斎藤茂吉が長崎医学専門学校教授となつて長崎に赴任する直前のことで、正午頃暇乞いに来て診てくれた。翌八日、小石川病院に入院、受診すると、急性盲腸炎との診断が下された。九日には赤彦の家で「アララギ」の編輯会を開く予定になつていたので、古泉千樫と土屋文明が来宅し、三人で「アララギ」に掲載する万葉集論稿の原稿を書き始めた。

はじめさほどと思わなかつた政彦の症状に変化が現れたのはこの頃である。十三日の夜に茂吉の送別会が開かれたが、赤彦は出席ができなかつた。十五日に茂吉の家で開かれた送別会にもやはり欠席している。

政彦が腹膜炎を併発、息を引き取つたのは、十二月十八日の午前零時³二十分であつた。枕頭にあつて臨終を見守つたのは、赤彦とふじの、それに重篤を聞いて郷里から奮然として上京して来た祖父政

信であつた。弟妹たちは政彦がまた息のあるうちに一人ずつ病室に入つて兄と最後の面会をした。

政彦死去の知らせを聞いてアララギの親しい仲間が駆けつけて来たが、「アララギ」新年号の編輯の仕事が切迫していた時で、土屋文明が主となり、宇野喜代（喜代之介）・横山達三（重）・中村美穂・木曾馬吉（藤沢古実）・高木今衛が手伝つて、棺側の一室においてその作業を徹宵して行つたことが同誌大正七年新年号の「編輯所便」に出ている。

平福百穂が葬儀万端の指揮を執つた。政彦の遺骸は、十九日、木枯の吹く武蔵野の大根畑のなかを通つて落合の火葬場に運ばれ、茶毘に付された。土屋文明と金原省吾が宰領の形で、土田耕平も棺側に従つたという。

政彦の正式な葬儀は郷里で営まれることになった。赤彦は、翌二十日、政彦の遺骨を抱いて帰郷し、二十一日に葬儀を終えた。葬儀を終えた赤彦が慌だしくも即日上京したのは「アララギ」新年号の校正の仕事が待つていたからである。二十四日に福山印刷所で書いた「編輯所便」の中で赤彦は政彦の発病以来繁忙を極めて今日に至るまで歌作を思うに由なかつた旨を記録している。

二十六日も馬吉と二人で夜まで校正に従っているが、この間に郷里から実父の病気の知らせが届き、父を見舞うために二十七日の夜行で東京を発つた。幸い浅茅は小康を保つことができた。この後、長野に廻っているのは、「信濃教育」の編輯のためであつたであらう。

政彦の急逝に遇つた後の赤彦は、前述のように寸暇さえ持たないほどの多忙の日が続いた。赤彦の仕事はしかし、「アララギ」の編輯・発行だけではなく、「信濃教育」の編輯も重要な任務である。

同誌に巻頭論文を執筆することは、編輯主任に就任して以来、赤彦が自分に課してきた義務であった。

その論説を書き上げなければならぬ期限が目前に迫ってきていたのである。赤彦はそのことを思つて焦慮したが、容易に筆を執る気持になれず、時を過ごした。年も押し詰まつた十二月三十日になつて漸く筆を起こしたものの、筆が渋滞して進まず、年を越した。正月二日の夜から三日の朝の六時まで起きて努めたが、やはり書き上げることができずに遂に断念した。

その論説「鍛練せられざる心」を赤彦が書き終えたのは、一月八日の未明である。政彦の死が赤彦にいかにか深刻な打撃を与えたかをその文章によつて知ることが出来る。

その論説の中で赤彦は、「予は予の児が、予の情の脆弱なるに肖るを恐れた。それがために、甘たるき躰方を避くるを念とした。児多く予を畏れた。畏るを知る心は、敵かなるものに入るの道と信じてゐる予は、児の予を畏れ、予の児を畏れしむる心を以て父子の道を行ふものとして多く怪しまなかつた。予は歌の道に於て先進者の後進者に対する甘たるき奨励が、滔々として後進者の心を低卑に就かしむるの現象を知つてゐた。予は歌の先生ではない。併し乍ら心から予に来つて、共に歌を究むる少数の後進者がある。夫れ等の人々に対して予は成る丈稱賛の詞を吝むと共に、出来るだけ微細の缺點をも仮借しまいと心掛ける。歌の道を畏れしむるは、歌の道を敵かに歩ましむる所以であると信するからである。」とその信念を記している。赤彦のここに見られることきリゴリズムは年来のものであった。それが政彦との死別を境として一段と厳しさを増すのである。

政彦の挽歌は、「わが子」(原作では「木枯」)「善光寺」「其二」

(原作では「善光寺」「雪」)「正月」「高木の家」「逝く子」など、多くの作品が発表された。このうち「わが子」の原作「木枯」は、『早稲田文学』大正七年一月号に発表されたものであり、赤彦自身が政彦発病の大正六年十二月七日以前に作つたものであることを述べているから、正確には挽歌とは言い難い。しかし、政彦の死後に作られた挽歌の連作と歌われていることがらにおいて連続するものであるから、この作も挽歌の中に含めてみることもできよう。

十月長男政彦信濃より来る。十一月上旬下谷神尾病院に入り鼻を治療す

病院に我が子を伴つて道とほし落葉ころがる日暮れの坂に足袋買ひて子に穿かしめぬ木枯の落葉吹き下す坂下の街に落葉せる大きな櫛の幹のまへを二人通りぬ物言ひながら忙がしき我れの仕事を思ひつつ子を守り行く冬木のまへを国遠く来つるわが子を埃あがる日ぐれの坂に歩ましめ居り

「わが子」に次いで発表されたのは、「善光寺」と「其二」で、「アララギ」の大正七年四月号に掲載された。赤彦が「秀普頭正彦信居士」の戒名が記された政彦の位牌を懐にして、二月四日の七七忌の當日、長野の善光寺に納めに行った折の歌である。

おのが子の戒名もちて雪ふかき信濃の山の寺に來にけり

(善光寺)

雪あれの風にかじけたる手を入るる懐のなかに木の位牌あり

(其二)

言にいでて言ふはたやすし直照りに照る雪の上に我ひとりなる

続いて「アララギ」の六月号に「正月」が載つた。事実の経過か

らすると、この方が「わが子」より早い、発表は後になつたのである。こうした例は一首の完成に苦心して、彫琢を重ねる赤彦においては稀なことではない。

心疲るれば眠りて起きぬ冬の日の明かき二階にいく日も居り

仏壇に蠟燭ともすみじか日の真昼其昼の原字明くなれり明るくなりけるかも

悲しみに馴れしに似たり冬の日の二階にものを書き耽り居り
籠りゐてたがひに寂し時をりに二階の下に物音する妻

秋になつて「高木の家」が「アララギ」の十月号に発表され、挽歌はこれをもって一応終わりを告げる。

母一人臥りいませり庭のうへに胡桃くるみの青き花落つるころ

(高木の家)

政彦まさひこの足音ききて鳴きしとふ山羊やまも売られてこの家になし

「子をおもふ

この家に帰り来らむと思ひけり胡桃の花を庭に掃きつつ

赤彦の内面的なものの変化がよく窺われる歌である。

こうして幾連もの挽歌が発表されたにかかわらず、しかし赤彦はまだこの時までには政彦の死そのものを正面に据えて詠んだ作品を発表していない。その挽歌の発表が期待されていたことは当然であろう。しかし大正七年が過ぎててもその挽歌は現れなかった。釈道空は、このことを批評して、赤彦の「敬虔な臆病」「氷魚の時代」大正八・一によるものとした。この道空の言葉を批判と受け取った赤彦は、『アララギ』の大正八年九月号の「短歌に於ける人事と自然」の中で次のように反論を加えている。「元来吾々の心が事象に対して感動する働きと、その感動を捉へて歌とする働きとは、両者の関

係極めて緊密でありながら、その働きが各異つた立場にある。感動と同時に歌は出来ぬのである。それは万人に通ずる心理的事実である。予のこの言を以て作歌に於ける感動輕視説をなすとするものは誤つてゐる。自己を中心とする人事現象は、自己の感動が強烈であるため、その強烈な感動作用から作歌の執意作用に至るまでに余計に時間を要する。余の子を失つた歌に一年半かかったことに対して、釈道空君は予の態度に「卑怯」といふ名を冠させた。予は何度も紙に対して歌の一句をも書き得なかつたのが事実である。作歌の心が感動にかへり、感動の心が涙を紙に落させるのが何月も続いたからである。涙を落すやうな予の心は弱い。その弱い心に名づけて卑怯といふならば、予は直にそれに承服する。予は自己を中心とする人事現象は感動が強烈であると言つた。強烈な感動が作歌の心となるまでには時間を要すると言つた。時間を要しても左様な感動から生れ来た歌は猶且つ「生ま」であり易い。感傷的になり易くて、写生が中途で腰をふらつかせてしまふのである。」

赤彦が挽歌を作り得なかつたのは、政彦との死別があまりにも強烈で悲痛な体験であり、作歌の執意作用に至るまでには時日が必要であつたためであるとしても、この間、同時に赤彦の心に作用していたものは、伊藤左千夫が長子究一郎を失つた時に詠んだ「招魂歌」、斎藤茂吉が生母守屋いくの死に遇つた時に作つた「死にたまふ母」などの挽歌を越える作品を作りたいという強い願望であつたに相違ない。殊に後者は、『赤光』に収められた四部構成、五十九首からなる大作で、茂吉の名を高からしめた秀作である。十歳の幼時に生母を亡くした赤彦にはその挽歌を作る機会は失われていたけれども、代りとしてあるべきものといえ、政彦の挽歌であつたであろう。「死にたまふ母」を作つた時に茂吉は三十二歳の無名の歌

人であったのに対して、赤彦はすでに四十二歳で今や歌壇の主流『アララギ』の編輯兼発行人の立場にあつたのである。政彦を哭する挽歌を容易に完成し得なかつたのも十分に首肯できることではなからうか。

その挽歌は、政彦の死去の時から一年近くを経た大正八年の五月号の『アララギ』に「逝く子一」として十五首が発表された。続いて「逝く子二」以下を作つて発表するつもりでいたものの、五月一日に養母ぬゑが病没したことから翌月に廻すことにした。ところがそれは結局、発表されないままに延引し、大正九年六月刊行の『氷魚』においてようやく「逝く子」全篇が完成を見せることになるのである。その作は、大正八年に発表した十五首に推敲の手を加えると共に新たに十一首を補つた、四部構成、二十六首の連作であつた。「逝く子」の全歌は次のごとくである。

逝く子

病むこと十日。十二月十八日午前零時半小石川病院に逝く。

ひたすらに面をまもれり悲しみの心しほらく我におこらず
むらぎもの心しづまりて聞くものかわれの子どもの息終る音を
ふるさとよりはるばる来つる祖父^{おはぢ}にもを言ひたりこの日のく
れまで
おほぢちの荒れし手のひらをさすりつつ国にかへりし思ひすと
言ひつ
日の暮れまでおほぢちの手をとりてよろこびたはやすきかもわ
が子の命は
顔のうへに涙おとさじとおもひたりひたぶるに守る目をまたた
かす

○
これの世に汝^いやはある吾^{わが}れの子の手をとり握りひたすらにあり
硝子戸の外にも星は照り満てりたちまちにして我が子はあらぬ
幼きより生みの母親を知らずしていゆくこの子の顔をながめつ
玉きはる命のまへに欲りし水をこらへて居よと我は言ひつる
田舎の帽子かぶりて来し汝れをあはれに思ひおもかげに消えず
山の村の隣人^{とほりびと}らに暇^{いとが}告げて来つる道には帰ることなし
ふたつの歳眼を病みしかば手をひき歩み思ひは永くこの子にの
こらむ
弟妹^{いもうと}らの悲しみ座りゐる前にかへり来れり知ることなし
子をまもる夜のあかときは静かなればものを言ひたりわが妻と
われと

○
とめどなく我^{われ}の眼^{まなこ}より涙ながれ友に面^{おもて}むかひ悔いてとまらず
友を見てはじめて心やすまれり堪らへてありし涙ながるも
枕^{まくら}べに幾夜をとほし疲れたる心やすまり今日涙出づ
ゆくものは止まることなし護国寺の冬木の森に日は間なく照るも
あわただしく命はゆきぬわが家の窓に日あたりきのふのごとし
父われを時のますらも口に呼び今も呼ぶかも物書きてあれば
いまはなる言^{こと}わすれぬや枕^{まくら}べに父の居らくは幾年^{いくとせ}ぶりぞと
釣台を揺するなかれと思ひしかば我が手をかけて坂をのぼりき
入院^{にゅういん}の日を想ふ
釣台のそとより我の呼びしとき^{いひ}応^{こた}へし吾子^{わがこ}を生くと思ひき

○
かぎろひの夕べの庭に出でて見つかへることなき命をおもひて
国遠くもちてかへりぬ画^えたくみがかきてたびたる吾が子の面^{おもて}を

『氷魚』が刊行されると、諸方から多くの賛辞が寄せられた。赤彦はこれによって歌壇に確固たる地位を占めることになるのである。大正十年三月号の『アララギ』が「氷魚批評号」として発行されたが、このとき寄稿を求められた田辺元のごときは、なかでも政彦への挽歌に最大の称賛の言葉を贈った。元は、「余は芸術家の解脱は其芸術創作に於てなされると信ずる。それは別に宗教的乃至哲学的の人生観を思想的に含まなくともよい。其創作自身が実作家の生ける人生観生活態度の表現だからである。」と言ひ、「此様な意味に於て余は氷魚一巻のみに「わが子」「逝く子」「正月」「善光寺」の連続せる一聯の歌を尊重措く能はざるものである。」と賞讃した。元はさらに「逝く子」一篇の中から作品を挙げて、「作者は之に於て愛児を喪へる悲痛を如何にたじろがざる心もて諦観し、如何に強くあざやかに之を表現して居ることであらう。」とか、「悲しみの情を悲しと歌はずして、自己の心に憶ひ出でて悲しみの心をいやまじしむる具象的事実をあざやかに歌ひ、之に由つて強き感情を集中的に表現して居る。是れ我々が殆ど涙なしにはそれを読む能はざる所以であらう。」とかと嘆賞し、その写生歌を称揚したのである。また、元は「作者にとつて悲を超越する途は悲を他に紛らすことではなく、之を一向きに体験しつづ其必然なる表現に努力することであつた。斯くて此尊き人間精神の生ける記録ともいふべき一聯の歌は生まれたのである。我々は其うちに何等の自欺驕飾とセンチメンタリズムとを見ず全体が悲に張り切つた魂のおのづからなる叫び声を成して居るのを見て、作者の芸術が即ち解脱であつたことを信じなければならぬ。」と書き、「一聯の悲歌は運命を愛する雄々しき魂の生ける表現として氷魚一巻の中に於て余の最も尊敬措能はざるもの、曩に余が氷魚の中に発見したと言つた著者の強き心は即ち之に

於て最もあざやかに示されて居るのである。」と言ひ、「余は畜に之のみを以てするも氷魚の尊むべき芸術品たることを主張するに足ると信ぜざるを得ない。」(『氷魚』を読む)と断言している。

五

政彦の死は赤彦の生涯における悲痛事であり、挽歌の秀作が残されたのも当然であるともいえようが、その死はまた子飼いの弟子、藤沢古実が言うように赤彦の作歌道において「一大転機を附与」(『赤彦遺言』)するものとなった。そのような変化は、むろん周囲の状況の推移との関わりの中であらわれてきたものであることは言うまでもない。

赤彦は政彦の死後、郷里に残っている子供が三男の周介の一人となつたのでこれも上京させることにした。同時に異母弟の瑞穂が長く世話になつた恩返しとして、三溝与八朗の子供の与市を北海道から呼び、勉強の機会を与えることにした。三月、周介が上京した。与市が上京したのも多分ほぼ同時期であつたであろう。

二人を加えて所帯の人数が増えたので五月に同じ小石川区内の関口町に転居した。

ところが赤彦が実父を見舞うために一月下旬に続いて六月に再び帰郷すると養父の政信から、妻子を帰郷させて欲しいとの希望が出た。養家では政信は六十五歳の老齢ながらなお農事に従事するだけの健康を保っていたものの、養母のぬぬは中風で長く病床にあり、政信は政彦が死亡したあと気落ちがして心細さを感じていたのである。赤彦のなすことに何一つ苦情を言うことがなかったと言われる養父からの道理ある話だけに赤彦はその意思に従わざるをえなかつた。六月十一日の夜の平福百穂に宛てた書簡の中で、赤彦は「小生

長男死去以後老父や、張合抜けの姿有之老母も床に就きつめなる上に衰弱や、加はり今回小生一寸帰宅の節父より東京引き上げの儀提出致され小生も甚だ尤もの儀なりと存候次第少くも愚妻及び子供は帰国せしめざる可らざるかと存候」と記している。それに兄三人が亡くなった今となつては、下古田の生家のことにしても赤彦が相応の配慮をしなければならぬ状況になつていたのである。

妻子を帰郷させるとすれば、赤彦一人が東京にとどまつて仕事をすることは極めて困難になる。自分が帰郷するとすれば「アララギ」の仕事に支障が出る。赤彦はこのことをめぐつて対応策に苦心した。

六月十四日の早朝に茅野駅に下車し、浅茅の病床を見舞つた赤彦は、父の命もそう長くは持ちそうにないことを感じた。「氷魚」に収められた「わが父」の詞書に、「老父年七十五、心安静にして却りて病後の頼み少なきを思はしむ。」とあり、作中の一首に「ひたぶるに我を見たまふみ顔より涎を垂らし給ふ尊さ」の歌のあるところから浅茅の病気が中風であつたことが知られるであらう。

浅茅が亡くなったのは七月十八日である。赤彦は東京で通知を受け取り、急遽帰郷したものの、臨終の枕頭に侍すことは叶わなかつた。

浅茅の亡くなった同じ七月十八日に、「アララギ」の古くからの歌友で、長野県の飯田高等女学校の校長をしていた湯本禿山が五十四歳で死去した。翌十九日にはやはり早い時期からの親しい歌仲間であつた諏訪山浦の篠原志都兒も三十四歳の若さで死亡している。

赤彦はこのような状況の中で家族を帰郷させ、自身も諏訪に帰住することに決めた。「アララギ」の編輯発行の仕事は、毎月の後半、十日余りの間上京して処理し、東京を離れることで手薄になること

が懸念されるアララギ会員への作歌指導については新たに面会日を設けることで対処することにしたのである。藤沢古実に発行所を守らせ、必要な事務の処理に当たらせることにした。三溝与市も古実と同居したが、翌大正八年七月からは諏訪出身の高木今衛も発行所に起居して古実の仕事を助けることとなつた。

七月下旬に家族を郷里に帰し、岡麓の周旋によつて八月、発行所を麴町区の下六番町二十七番地の佐々木修方に移転して、態勢を整え直した。

政彦の亡くなったあと、赤彦の身辺で起こつた変化は、右のようなものであつた。赤彦の歌は、そしてこの慌だしい変化の一時期を境にして、いよいよ本道に出てきたのである。

十月十日、赤彦は、平福百穂に宛てて今後に向かう自分の決意を次のように書き送っている。

我等ノ目ザスベキハ只精進ノ一道ノミマコトノ命ハ人シラズ
世知ラザル間ニノミ涌クベシコノ道寂シクコノ命悲シケレドモ
終生居ルベキニ居ル亦以テ自ラ楽シムニ足ル

赤彦の気持は、この一節に見られるように著しく内向的に傾いた。そして赤彦はひたむきに精進に向かうのである。たとえば大正八年一月号の「アララギ」に掲載した「大正七年の「アララギ」において赤彦は過去の一年間のアララギの活動を総括して、「「アララギ」の足は、いつもその一方が前の岩にあげられてゐるつもりである。他の一方をその岩まで上げるために工夫をつづけてゐるのである。」と書き、われわれは世の中にもつと平易な道——平地道と流行道——のある事を知つてゐるけれども、しかし、「この二つの道はいくら歩いても、距離はあるけれども高さがない。」と言ひ、「他

人の性命は自分の性命ではない。自分の性命に執着あるものが他人の道を平気で歩いてゐられる筈がない。」と言いつつ、芸術の高地を指して、一筋の狭く険しい道を歩みは遅くとも一歩一歩踏みしめて確実に前進しようと精進を重ねるのである。

赤彦は、大正八年の暮になると、『信濃教育』の編輯主任の職も退くことに心を固め、翌年三月に退職した。後年『太虚集』の「巻末記」に、『水魚』の時期の終り頃には諦めに似た心が、底の方に潜んでゐたやうである。」と記した心境の変化が現れたのは、このとき歩みの自ずからなる帰結であつたと言つてよい。そして心境の変化はまた、歌風の上にも現れてきた。

次の歌を見ても、赤彦の姿勢の内向化は認められるであろう。

汽車のうちに夕べ聞ゆる山の田の蛙のこゑは家思はしむ

(紫雲英)

わが村に道近づけり春すぎて短かき草に心ぞううごく

我が家に月に一たび帰るゆくよるこび心寂しくなりぬ

政彦を失つた悲しみを共有することによつて妻のふじのとも相親しむ気持ちが湧いてきた。

岡の家に妻と起きゐて知りにけり郭公鳥の夜啼くことを

(郭公鳥)

旅にして暮らす日おほしたまさかに妻と起きゐて茶を飲む真夜中
子を喪ひ母をうしなひ悲しみを知れる我が妻に心したしむ

数え年の十七歳で赤彦の妻となつたふじのも大正八年にはすでに三十四歳である。夫に対する理解もかつてとは異なり、格段に深くなつていたのである。

こうしてやがて赤彦は鍛練道を提唱し、精進の一途を進むことになつた。赤彦はしかしそのような日々においてもたと政彦のことを忘れることはなかつた。大正八年、かつてうたと共に住んだ北安曇郡池田町に赴いてアララギ歌会に臨んだ際には、

ゆくものものこるも空しこの駅に二十年むかし妻と住みにし

(池田町)

と詠み、往時の生活を追懐して感慨にふけてゐる。

また、大正九年一月号の『アララギ』には政彦に関わる歌が見出される。

まがなしき命つづかむたまさかに我が家のうちに籠りて思ふ

(蒲田二)

二とせまへい逝きし吾子が書きし文鞆に入れて旅立たむとす

赤彦の歌は、『太虚集』の時期に入り、大正十一年秋冬の交に至つて、晩年の歌風が現れてくる。そしてこの時期の秀作の中にも政彦を詠んだ歌が認められるのである。

子の逝きしは十二月十八日なりき

長子政彦の逝きしは十二月十八日なりき

冬空の澄むころとなれば思ひいづる子の面影ははるかなるかな
旅にして逝かせたる子を忘れぬや年は六とせになりけるかな
命にしひそめるものを常知れり心かなしも空澄むこのごろ
霜月の真澄の空に心とほりしまらく我はありけるかな
冬とおもふ空のいろ深しこれの世に清らかにして人は終らむ

これらの作は、大正十二年一月号の『アララギ』に掲載されたものであるから、多分、政彦の六回忌に当って詠まれたのであろう。

さらに最晩年の歌を取めた『栴蔭集』の中にもうたを詠んだ歌が見出される。赤彦は死去の前年、大正十四年一月の末から二月のはじめにかけて伊豆半島の土肥温泉に行き、数日の間、同地に逗留している。すでに身中に生じた癌の腫瘍が成長をはじめていたことに気付いてはいなかったけれども、諏訪の冬のきびしさが身にこたえるので、避寒のために暖国の温泉地に出掛けたのである。土肥行きの収穫「土肥温泉」の中に次の一首がある。

逝きし人々の面影今にして皆遥かなり。心閑なれば即ち思ひ出づ。今年一月末伊豆土肥温泉にありて

亡なきがらを一夜抱かきて寝かしこともなほあきたらず永と久はに思はむ
この作については斎藤茂吉が第五句に左千夫の連作「招魂歌」の一首や、万葉集の歌句に類似のものがあることを指摘している。それは茂吉の指摘のとおりであるけれども、赤彦の歌は表現がより具象的であり、かつ晩年の暢達の声調をあらわしており、それらとはまた異なる独自の風をもっていると言える。

斎藤茂吉ははじめここに歌われたのは政彦であるととした。それが疑問を呈する者があって、再考の結果、自分もうたであると考えるに至ったということとその随筆『董馬山房夜話』の中に記している。この作がうたを詠んだものであることについては、大正十一年二月に赤彦が西田幾多郎に宛てて送った書簡によって明らかであると
言ってよい。

拝皇日を経るに従ひ御悲愁更に新なるを覚え給はんと奉拝察候
御生前アララギ御覽下され候由承り感慨を加へ申し候小生一度も拝

顔せず遺徳奉存候御縁を以てアララギに発行補助費御寄贈下され候段恐縮の至に不堪肅敬して拝受仕候深く御礼申上候小生妻を失ひしは二十七歳その間生れし子は当時三歳この子十八歳にして又近けり先月末より土肥温泉に一人起居して一夜端なく往時を追懐して夜を更かし候先生の御胸中を小生の心にて拝察するは及ばざるの甚しきものに候へ共何とも申上げやうなき心持して此の筆執り居り候土肥にての歌押しがましく候へ共一首御目通し下され候はば幸慶存上候敬白

亡きがらを一夜抱きて寝しことも猶抱き足らずとは思はむ

二月六日

俊生

西田 先生 座下

右に見るとおり、この歌は、西田幾多郎が夫人の死後、故人が『アララギ』の読者であったことから、アララギ発行所に寄附金を贈ったのに対して赤彦が礼状を兼ねて送った悔み状に記されたものである。書簡の文面からみても歌われているのがうたであることは瞭然であろう。西田幾多郎は当時京都帝国大学の哲学教授であった。赤彦は同大学所蔵の鎌倉時代の学僧仙覚書写の万葉集古写本を閲覧、筆写するために大正十一年の十月に京都に赴いた際に岩波茂雄の紹介で西田の世話を受けたことがあり面識があったのである。先に引いたうた死亡当時の赤彦の日記と照し合わせてみると、歌われたのがうたであることはさらに明白であろう。

赤彦とうた及び二人の間に生まれた政彦との係わりについて概観した。

赤彦とうたとの縁は、さきに述べたように旧藩時代以来の旧習の中において、赤彦の久保田家への婿入りによって結ばれたものであった。しかも、二人の中には深い愛情が生まれ、育まれて、その愛

は長子の政彦に及んだのである。赤彦はあるいは優しく聡明なうたの中に、十歳の時に失った生母の面影を見ていたと言っているのかも知れない。政彦に対しては、明らかに幼くして生母と死別した己の影を重ね合わせていたのである。政彦が病弱であるが故に、政彦に注ぐ愛情はいっそう強く深いものになった。しかも二人との永別によってうたと政彦に対する愛情は赤彦の生の内部に深く潜まり、そこに生き続けて、やがて多くの秀作として昇華されたのである。

注

- (1) 赤彦は当時、写実主義を信奉する立場から、文語・口語の別を問わず、一種の写音的仮名遣いを用いていた。
- (2) 歌の右側に注記してあるのは、原作又は初案である。以下の例についても同じ。
- (3) 歌集「氷魚」に収められた「逝く子」の詞書には「午前零時半」とあるが、当時の赤彦の書簡によれば、政彦の死亡時刻は「午前零時二十分」である。
- (4) 赤彦は「氷魚」の「巻末記」でも次のように釈明している。「予は或ることに遭遇してその感銘を歌に現す場合に、可なり多くの時間を用ひる事がある。或ものは一年以上を費したこともある。夫れを名譽とは思つてゐない。自分の技巧が自分の感銘を現すに足らないために同じものを何時までもつづいて居らねばならぬのである。予の一聯作の歌の中には、或は事に引きつづいて成つたものもあり、或は事をずつと経過してから成つたものもある。経過してから成つたのは必しも経過してから作りはじめたのではない。時間を費すことと少くして出来あがることは予と雖も希ふ所であるが、今は致し方がないのである。今迄予の制作の態度について言儀をたまはつた

方々もあるからと思ふから、此の機会にこの事を明らかにして置かうと思ふのである。」

- (5) 本林勝夫氏は、「島本赤彦」(『日本近代文学大系』44)の「補注一四」において、「二年越しに推敲を重ねた苦心の作に対してたとえは釈迦空のような比較的同情を欠いた批評(『同人寄合語』「アラギ」大正8・6)が出たのにあき足りなかつたのではあるまいか。」と推測しておられる。首肯すべきであろう。

- (6) この作は、「氷魚」では「二十年まへ住まひてありし駅に来て思ひ出でけり亡き妻のことを」と改作されている。